
きつ らぶっ

夏川 梓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きつ らぶっ

【Nコード】

N2640D

【作者名】

夏川 梓

【あらすじ】

「この想いは貴方に届きますか？」胸の中にあるのは、昔から変わることのないたった一つの“想い”。それを伝えるために、今、貴方に逢いに行く！とーっても一途な狐の女のこ、体育会系の幼なじみ、引っ込み思案のクラスメイト、明るく元気な転校生 至って平凡な少年と少年の周りにいる少女達が織り成す一つの物語。貴方の《はーと》は何処にありますか？

くぶろろーぐ（前書き）

初投稿作品！面白く読んでいただきたいなあ
す
と私は考えてま

くぶろろーぐ

貴方に逢いたい。

十年前のあの寒い冬の日から募り続けている想い。どれだけの想いにこの身を焦がし続けているのだろう。

だけど。

この想いは貴方には届かない。どれだけ想っても貴方には逢えない。

だって、貴方はこの町からいなくなっただから。

貴方に逢いたい。

今でも鮮明に思い出せる。
あの時のことを。

津々と降り続ける雪が身体から温かさを奪っていく。

足の周りに広がる朱色が、身体から熱を漏らしていく。

森の中。

半分以上雪の中に埋もれながら“私”は息絶えるのを時を静かに待っていた。

どうしようもない脱力感。

どうしようもない情けなさ。

どうしようもない 絶望感。

生を諦め、死を受け入れ、来世のことを願いながら、ただ静かに待っていた。

だけど、“貴方”が現れた。

がさがさと茂みを揺らして、ひょこつと出した頭。貴方は驚いたように目を丸くして私を見つめた。私は既に動く気力すら失い、冷めた思いでその様子を見つめていた。

「だいじょーぶ？」

おどおど私の前にしゃがみ込み、そつと私の身体に手を這わせた。

温かい手だった。

冷え切った私の身体に、その温かさは優しく染み込んだ。それと同時に疑問も湧いた。

どうして、と。

どうして優しくするの、と。

そんなことはお構いなしに貴方は私の上に積もる雪を払いのけてくれた。

「あ けが」

足にある浅からぬ裂傷を見た少年は踵を返して、もと来た道を戻っていった。

その時、私は再び絶望した。

貴方の優しさに救われた気がしていたから。見捨てられたと思って、絶望してしまった。

だけど、それは違っていた。

また、うつすらと身体に雪が積もり始めた頃に貴方は戻って来た。小さなリュックサックを背負って、毛布を両腕に抱えて。

貴方は私の傍らに、冷たい雪原に膝をついて、リュックサックから救急箱を取り出した。その中から消毒液とガーゼと包帯を取り出した貴方は傷の手当を始めた。

傷が痛み、呻く私に貴方は優しい言葉を投げかけてくれた。

「大丈夫だよ？我慢してね？」

初めてなのだろう。

悪戦苦闘しながら貴方が巻いた包帯は、ちょっとだけ歪んだりしていた。

手当の終わった私に貴方は持ってきた毛布をかけてくれた。

他にも鞆の中からミルクや魚を取り出して、私に食べさせてくれた。

そうこうしている中に夕方になって、貴方は

「また明日、来るからね」と言い残して帰っていった。

その時にはもう、貴方に想いを抱き始めていたのだろう。

貴方は約束通り次の日も来てくれた。違う。毎日来てくれた。私の怪我也治って、一緒に走り回ったりした。それは私にとって、とっても充実した幸せな日々だった。

でも、そんな日々は長くは続かなかった。

雪の溶け始めた春先。

貴方は私に抱き着きながら泣いていた。とめどなく、大きな声をたてて、涙が尽きてしまうのではと心配するほどに。

「ぼく、おひつこし　しちゃうの　とお、い　まちに」

貴方の放った言葉に私は何も言えずに、そっと寄り添うことしか出来なかった。

「いや、だよ　会えなくなるの　やだ、なのに　」

私も同じ気持ち。

貴方が居たから今の私がある。出来るならば、貴方から離れたくない。でも、私には引き留めることが出来ない。

「だ、から　きみに　プレゼント　わす　れないで」

そういつて取り出したのは赤色の首輪だった。その裏には文字が拙い字で書かれていた。

それを貴方は私の首にそっと巻き付けた。私が小さく首を動かすと綺麗な鈴の音が聞こえる。

「わす、れ　　ないで、ね？」

最後に呟かれた言葉は余りに小さかった。それでも、私の耳には届いた。それは貴方が私に贈ってくれた最高のプレゼント。今、私が名乗っている“名前”だった。

「ばいばい」

そうして、貴方はこの町を去った。

貴方に逢いたい。

回想に浸っていた心を現実に回帰させ、私は決心していた。
逢いに行こう、と。

忘れられているかも知れない。
それは嫌だ。

受け入れてもらえないかも知れない。
そんなの怖い。

それでも、いい。

忘れられたのなら、一から。

受け入れてもらえないなら、

「感謝のお礼」だけ。

私は決めた。

貴方に逢いにいく。

私は一つ想いと共に、走り出した

。

、

くぶろろーぐ（後書き）

いや、もう、何て言うのでしょうか　　情けない？文章力でスイマセン、としか。色々と思うところはありますが　　まあ、いかな、なんて思ったり。　　今回はシリアス（？）ですが、回を経るごとにヤバくなっていく予定です（笑）　　次回更新は　　なるべく早くします。

くふおつくす・01〜（前書き）

貴方に逢いに来たよ

くふおつくす・01

「　　ここ、なんだ」

一人の少女が目の前 of 建物を見上げながら呟いた。
その顔には一杯の笑み。

「ここに、貴方がいるんだ」

何かを掴むように手を伸ばす。
まるでそこに大切な何かがあるように。

「逢いに来たよ　　！」

桜舞い散る並木道。
穏やかに流れる川。

町並みを小鳥達が歌を唄いながら飛び回る。
全てのモノが陽気に浮かかされているような、
気持ちのいい天気。

そして　　。

「おはよう、圭！」

トン、と軽い調子で叩かれた肩に少年　鴛野　圭は振り返った。
そこにいたのは腰ぐらいまである長い髪の毛をサイドポニーに纏
めた圭の友人で、クラスメートの楠瀬　伊織だった。

「おはよう」

見た目からも分かるように普段は快活でサバサバした性格をしている。悪くいえば優柔不断の圭とはまったくの正反対である。もつとも、伊織には一つだけ悪い癖があるのだが。

「今日ね、うちの学年に転校生がくるんだって」

「へえ」

「へえ、って何よ。もうちょっと他にリアクションはないの？」

「いや　リアクション、といわれても」

困りながらも頭を捻る。

だが、良いリアクションが思いつかない。

そんな圭と伊織、二人に声が掛かった。

「おはよう、伊織　えっと、お、鴛野くん」

「あゝ法子！おっはよ〜」

「おはよう、平井さん」

平井　法子。

非常に大人しい性格で人見知りの女の子。圭と伊織のクラスメイトでもある。

「ねえ、法子」聞いて聞いて！私が圭にね転校生が来るって教えてあげたら　『へえ　』　って、それだけのよ！酷くない！？」

伊織のマシガン Took に法子は圧倒されたように腰を若干引かせていた。

それでも伊織はなお、法子に詰め寄っていく。

「だから私がね、もつと良いリアクション欲しいな、って甘えたらさ、『じゃあ、一人で身をくねらせてれば？』だって！そんなの私に変人みたいじゃん？！」

何か今、事実を捏造されてとんでもない事を言われたような。

「ちょっと待った！言っていない！言っていないよ、そんな事！？それに何！？甘えたって！」

圭は慌てて事実を歪め始めている伊織に制止を求めるも、伊織は既にヒートアップしており手が付けられなくなり始めている様子。その餌食になっている法子。

「ご愁傷様です　。」

事実の訂正は後ほど、涙目になりながらガタガタ揺さぶられている法子に行おうと思い、圭は心中で手を合わせた。

と。

聞こえてくるチャイム音。

圭は腕時計に視線を落とした。

「うわっ、やば！ 伊織！平井さん！予鈴が鳴ってる！」

「ええっ！」

「は、早くしないと」

辺りを見渡せば同じように予鈴を聞いた生徒が走り始めている。

「ほらほら！ゴーゴー！遅れちゃうよー！」

「誰のせいだよ！誰のっ！！」

圭の叫びが春の空に響き渡った。

「いやゝ、朝から全力疾走は疲れたねゝ」

「誰、の せい、だ！」

息の乱れを整えながら圭は、あまり息を乱さずにいる伊織に突っ込んだ。

その隣では法子が真っ青な顔で金魚のように口をパクパクとさせていた。

「ほらほら、お前ら、席につけ」

今しがた三人が入って来たばかりの扉から入って来たのは二十代

後半の若い男の教師だった。

彼はこのクラスの担任である菱川^{ヒシカワ} 歳^{サイ}と言う。

引き締まった身体に、見るもの全員に好印象を与えるかのような顔立ち、大らかな性格で生徒たちからは絶大な人気を誇っていた。

圭たち三人は慌てて席につくと、日直が号令をかける。
再び席につくと。

「あー、お前らの中にも知ってる奴はいると思うが 転校生がこのクラスに来ることになった」

菱川の言葉にクラスがざわめきたった。この反応はほとんどの人間が知らなかったようだ。

その情報を知っていた隣に座る伊織の方をチラリと見ると、視線に気がついた伊織はピースをしてみせた。

そんな伊織に気をやることもなく、菱川は話を続ける。

「まあ、色々とあつて今日からの合流だが仲良くしてやれよ。
入れ」

廊下に待機させてあった新しいクラスメートになる人物に声をかけた。

再三、扉が開かれ、その人物は入って来た。

チリン。

淡い金色をした髪の毛。

白磁のようなきめ細やかな肌。

栗色の大きな瞳。

見るもの全員に同じ感想を抱かせた。
可愛い、と。

少女が歩を進める度に小さく鳴る、首に巻き付いた赤色の首輪の
鈴の音。

菱川の隣に立った少女は、頭を下げた。

「秦 ちかる（ハタ チカル）です」

顔を上げた少女は可愛らしく微笑み、

「よろしくお願いします」

もう一度、頭を下げた。

チリン。

くふおつくす・01（後書き）

X・m a s E v eですね。私は弟と妹と三人。何か寂しい

とまあ、愚痴は置いといて。本編いよいよ開始です。次回、

逢いに来た“ちかる”に対して“圭”は？ 次の更新、年内に

出来るかな？

くふおつくす・02} (前書き)

貴方は私を忘れたの？

くふおつくす・02

圭は目が離せなかった。

前に立つ少女 『秦 ちかる』から。

チリン。

胸の中で渦を巻く、

あの少女を見ると。

あの鈴の音を聞くと。

あの赤い首輪を見ると。

ひどく懐かしいという気持ち。

それは一体何なのか。

それは一体何故なのか。

圭自身にも分らない。

ちかるはゆつくりと教室全体に視線を巡らし、唐突にその動きを止めた。

その場所は窓際から二列目、後ろから三番目の席。そこに座っているのは、鴛野 圭、その人だった。

目があつた瞬間、二人は対照的な表情をした。

圭は明らかとまどい。

ちかるは嬉しそうな笑み。

その笑みは先ほどまでのような淡い微笑みでなない。一瞬でそれと分かるような満面の笑み。

その笑みが何を表すのか圭が推し量ろうとした時には、ちかるは駆け出していた。

「え？」

「圭様っ!!」

ちかるは人間にあるまじき跳躍を見せた。

そして。

「逢いたかった!逢いたかったです!ずっとずっと貴方に圭様に逢いたかった!!」

圭の胸の中にすっぽりと納まり、頬をその胸に、首に、顔に擦り付けていた。

その突飛な行動には圭だけでなくクラス全員が固まった。唯一動いているのが、未だに頬を擦り付けているちかるだけ。
と。

「
鴛野」

地の底から響くような声。
恐る恐る視線を巡らせば、地獄からはい上がって来た幽鬼が如く
のクラスメートの男子。

「っ!!」

本能的に危険を感じた圭はちかるをぶら下げたまま走り、教室を
飛び出していた。

「
ユルスマジっ!」
「
鴛野ヲヤレっ!!」

後ろからは幽鬼と化した男子。

「圭様あゝ」

首元には甘えるちかる。

「誰か 誰か助けてくれえっっ!!」

圭の叫びは無情の如く、消えていった。

男子が居なくなった教室では取り残された女子達は、圭とちかるの関係についてありとあらゆる憶測を交わしていた。

曰く、幼なじみ。

曰く、元彼女。

曰く、現彼女。

曰く、愛人。

曰く、そんなプレイ。

至極真つ当そうなものから、トンデモなものまで、皆、好奇心丸出しで騒いでいた。

「何よアレ　！」

伊織を除いては。

顔中に不満不服を浮かべて圭とちかる、男子が出ていった扉を見て、もとい睨みつけていた。

その形相は鬼ですら敵わないようなもので。

しかし、そんな伊織に話し掛ける者が一人いた。

「い、伊織　どう、したの？」

「どうもこうもないわよっ！いきなり圭に抱き着いたりして！

アレ何なのよ、法子っ！？」

人を“アレ”呼ばわりするのはどうかと思いつつもそのことは口にださずに、法子も伊織と同じように扉に視線をやった。

「幼なじみ、とか　」

「それは私達！」

「友達？」

「上に同じっ！！」

無茶苦茶な、と思いながらも法子はいくつかの例をあげたが、
とごとく切り捨てられていく。

そして。

「あゝもう！なんかイライラするっ！！行くわよ、法子っ！！」

「え、えっ？ええっ！！？」

何処にと訴える法子を問答無用で引きずりながら、前で未だに茫然としている担任の前を伊織は通りすぎ、廊下に出た。
それでも担任は反応しない。

廊下からは法子の悲鳴。

教室からは女子の話し声。

何処からかは男子の叫び声。

ちかるの行動から始まった騒動はまだ落ち着きそうになかった。

何処までも広がる青い空。
その空を彩る桜の花びら。
そして。

「 し ぬ ！」

このシチュエーションには相応しくない程に息を乱し、倒れている圭。

その顔は真っ青で、あと一押しでもあれば本当に死んでしまうのではないかと思わせる程だった。

そんな事態が数分間続いて、ようやく圭は落ち着きを取り戻せた。視線を巡らし、この場所 屋上に自分達以外がいないことを再度確認してから、圭はフェンスの向こう側を眺めている少女 ちかるに視線をやった。

「 すね」

「 え？」

何か聞こえたように思ったのだが、ちかるは振り向き何でもありませんと首を振った。

それよりも、と。

「 お久しぶりです、圭様」

圭は戸惑った。

先程からそうだ。このちかるという少女はまるで圭に昔、逢っていて再会したとでもいうように話し掛けるのだ。

圭としてはこの少女と逢ったことなどない、はずだ。はずなのだが。

記憶が酷く曖昧で何か大切なことを忘れているような感覚と、ほんの少しきつかけがあればぱっと思いつくような感覚が揃って胸の中に居座り、何とも言えない気持ち悪さが蟠^{わたかま}っていた。

「 覚えて、いらっしやいませんか？」

黙っている圭にちかるとは問い掛ける。

「ごめん」

「まあ、仕方ないです。この姿でお会いしたことはないのです」

意味が分からず不審げな表情をする圭。

そんな圭にちかるとは次の瞬間に爆弾発言を放り込んだ。

「私は十年前の冬の日、貴方に助けられた。狐です」

くふおつくす・〇三〇 (前書き)

貴方を怖がらせたくない。だけれども、さようなら、と言つのはとても苦しくて。

くふおつくす・03く

夢に見た。

貴方の隣に立っている私を。
貴方の笑っている顔を。

その貴方が今此処に、目の前にいる。

それが嬉しくて。

それが幸せで。

そして 怖くて。

二つの意味で涙に霞みそうになる視界を必死に、ちかるは保って
いた。

圭は自分の耳を疑った。

ちかるの口にした言葉があまりにも突拍子なかったから。それは
思考停止に追いやられるには十分なものだった。

ちかるの言葉が頭に染み渡り始めたと同時に圭に訪れたのは、果
てしもない驚愕だった。

「なっ
」

圭はなにかを言うように口を動かすが、全くに言葉になっていない。本当に心の底から驚いた時は声が出ないものということを、圭はこの時初めて知った。

「あ の 圭、様
」

ちかるの呼びかける声は非常に小さく、目も少しばかり潤んでいる。

「覚えて いらっしゃいません、か ？」

最後の方は掠れてしまい、風の音に紛れてしまうほどだった。圭は驚愕から立ち直れていない頭で必死に言葉を纏め、それを口にした。

「ちよ、ちよつと待って！狐、って 君どこをどう見たって 人間だろ！？」

その疑問も当然。

その姿は人間以外のものでは有り得ない。漫画や小説でよくあるような変化をミスったような痕跡すら見当たらない。

頭の中はこんがらがっていたが、さらに拍車をかけるような事態が圭の目の前、ちょうどちかるの頭の上で起こった。

ぴょこん。

そんな擬音が当て嵌まりそうな感じで、頭の上に二つの物体が現

れたのだ。

現れたソレは金色の毛をしており、ひくひくと可愛らしく動いている一対の　狐耳だった。

おまけに何やら聞こえる衣擦れのような音に足元に視線を落とせば、スカートの下からは金色のふさふさとした尻尾が不安そうに揺れていた。

「それでも“人間”と　言えますか？」

「っあ　ああ　」

圭は腰を抜かしたのか、床に座り込み、驚愕とも恐怖とも畏怖とも取れる表情でちかるを見上げていた。

その表情にちかるは眉尻を下げ、俯き、小さな嗚咽を漏らした。くるりと圭に背中を向けて、屋上の扉の方に向いた。そのまま静かに歩き始める。

「あ　ま、待って！」

歩みを止め、ちかるは振り向いた。その表情は笑っていた。頬に幾筋もの雫を流しながら。

「怖いすよね。私みたいな化け物は。無理しないで下さい。怖くて　当たり前、ですから。私のこと　忘れてください。二度と圭様の前に、現れません」

そう呟くちかるは本当に淋しそうで。

「あの時、助けて貰った恩を返したくて　ありがとう、ござい、ました　。　もう一度、圭様に逢えて　良かったです」

その言葉を聞いた瞬間、圭の頭の中で何かが弾け飛んだ。

「待てって 言ってるだろ!!! ちかるっ!」

「っ! でも、私は」

「聞け!」

立ち上がった圭は深呼吸をして、真っ直ぐちかるの目を見た。

「はつきり言つて、そんなことがあったのか 覚えていない」

ちかるは狐耳をしょげさせ、しっぽも力無く垂れ下がった。だが、次の言葉にちかるは自らの耳を疑った。

「でも 君をはじめに見たときに、懐かしいって感じた。何処かであつたことがあるような気持ちがしたんだ。だけど、覚えていない俺が恩を返して貰うわけにいかない。だから 思い出すよ。思い出して、その時に君からの恩返しをうける。それまで 此処にいてほしい」

「圭様っ」

「うん。 教室、戻ろっか」

「はいっ!」

「でもその前に 耳と尻尾、隠さないと、ね?」

「あ! はい。 ん、しょ はい。これで大丈夫です」

涙の跡の残る顔を上げたちかるの顔は、眩しいくらいの笑顔で。

二人の物語が、

「圭様、これからよろしくお願いします」
「こちらこそよろしく。ちかる」

今、動き出した。

くふおつくす・03く（後書き）

ふおつくす はーと、完結うく ってなわけはありませんよ？
まだ続きます。これから始まるのは、何の変哲もない学校生活です。
だけど、もともと狐のちかるにはちよつと大変な生活かも知れませ
んね？次回は、あの二人も登場していただく予定です。【追記】大
学の用事や行事がこれから多くなりますので、更新が遅くなるかも
知れないですが、最後まで書くつもりですので、気長にお付き合い
頂けると、私は幸せですm（――）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2640d/>

きつ らぶっ

2010年10月9日06時08分発行